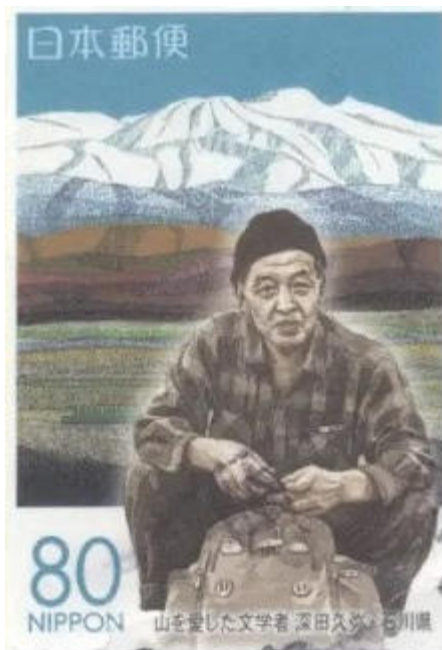


(2) (創作活動)

作家としての深田久弥という人物はどうであったのか。「深田久弥の山さまざま」を編・解説した池内紀は、はしがきで「深田久弥のこと」と題し、「山のエッセイストとなる前の深田久弥はマイナーな作家だった。オロッコの娘、あすなろう、津軽の野づらなどで知られている」とし、更に作風は「清新甘美」であって、それが決まり文句だったという。「清新甘美」という「その初々しい作風を愛されつつ、同業の作家や批評家たちには、多少とも軽んじられていたのではあるまいか」と評している。ドイツ文学者で山の愛好家でもある同氏の評価は、ほぼ的を射ているのではないかと思う。



深田久弥が文学作品を本格的に著した時期は、年譜からみて昭和3年の25才頃より応召した昭和19年の間の約15年間ではないだろうか。この期間、小林秀雄、宇野浩二、川端康成、広津和郎、林房雄などが活躍していた。特に文学好きではなかったが、これらの文筆家の名前は知っていたし、幾らかの作品も読んだ記憶があるが、深田久弥の作品は勿論、名前さえも山歩きを始めるまで寡聞にして知らなかった。

深田久弥は改造社編集部員の時、懸賞小説応募者だった北畠八穂と知り合い、26才(昭和4年)の時、八穂と同棲した。八穂は脊椎カリエスを患っていたこともあり、同居後11年経てようやく深田家の許しを得て、正式に結婚した(昭和15年)。同棲したその年に、「津軽の野づら」を発表した。「その素晴らしさに感心した井伏鱒二が、深田に「あれは半分ほど八穂さんが書いたんだろう」と羨ましがって」と、深田はあわてて否定しているが、この時期から八穂の下書きを深田が清書(添削あるいは改稿)して、深田の名前で発表する機会が増えていったのだと思われる。「八穂は深田を世に出すべく全力を傾注して応援したのである。二人が話し合った上、納得ずくでの「二人三脚」による深田の文壇仲間入りであったのだ」と言われている(「日本百名山の背景 深田久弥二つの愛」の「深田と八穂の共同作業」の項)。翌昭和5年に発表した「オロッコの娘」が川端康成に褒められ文壇注目の作品になった。同人誌ランクの作家から一人前の作家の階段を一気に昇って、そして昭和7年29才で居を東京から鎌倉に移し、鎌倉文士になった。

深田久弥の創作活動は、リアリズム系の叙事的作品、ロマンチズム系の抒情的作品、文芸批評家としての執筆、山の文学者としての紀行・随筆などの四つに書き分けられていたという。後年、深田久弥と八穂の間で悶着が生じ、八穂が抒情的作品は「自分の作品」であると主張した際、深田久弥は何も言い返さなかったという。「八穂は「私が夜書いておくと、深田が翌朝それを清書して編集者に渡すだけでした。だって見てられなかったもの。締切が迫っても一向に出来ないから、仕方ないからそうしてました」と言っていた」と編集者は生前の八穂から聞いたという。八穂の作品は「深田による加工、リニューアルがなければ市場価値を持ちえない、まだ原石のままの作品である場合が多かったと思われる」とも言われている。

深田久弥を文壇に押し上げたのは、「津軽の野づら」や「オロッコの娘」などの「清新甘美」の作品である。それらの作品は八穂が言うように、穏やかに言えば八穂との合作であり、厳しく言えばどう言えば良いのだろう。いずれにせよ深田久弥単独による創作ではなく八穂の才能に助けられていたと言える。二人でロープを結んでいたとすれば、八穂が引き揚げていたのかな。こんなエピソードが紹介されている。昭和12年に「鎌倉夫人」を新聞連載することになった際のこと、編集者は「新人作家となったH氏に新聞連載の機が訪れた。川端康成氏が新聞連載のコツを教えにH家を訪ねた。八穂が「あ、それは本人にお聞かせください」と言うと、「いや、奥さんに言えばいいです」と済まされたという。感付いておられたようだ。この小説も、八穂の発想、着眼、文章であるとハッキリ分かる作品である」と書いている(上述の引用は「日本百名山の背景 深田久弥の二つの愛」より)。

深田久弥と八穂との創作活動を巡る関係について、「日本百名山の背景 深田久弥の二つの愛」はかなり明らかに書いているが、「日本百名山と深田久弥」は「津軽の野づら・文芸書目概観」の項で、「戦前、北畠八穂と共にあった頃の作品については、その創作過程をめぐって種々の見解があるが、「津軽の野づら」は深田の名を高めた作品であることは間違いない」と記し、「種々の見解」としている。本の主題の置き所に違いがあるが、作家を扱うからには、重要な観点である創作過程を追究せずに「種々の見解」で済ませているのは敵前逃亡のように思える。要のところで逃げを打ちながら、他方で人格や「日本百名山」などの作品を褒めているのである。

運命の悪戯とよくいうが、深田久弥は八穂を正式に入籍させた翌年昭和16年の5月に文芸評論家中村光夫(本名木庭一郎、志げ子の弟)の結婚披露宴で一高時代に見初めた少女、志げ子と18年振りに再会し、翌月の6月には二人は雨飾山に登山し、数日温泉に滞在した。そして翌昭和17年に二人の間に森太郎が誕生した。深田久弥は志げ子との愛を得た一方で、鎌倉文士としての作家生命を破滅させるかも知れない賽を振ってしまった。八穂は昭和18年5月に二人の不倫を知る。このため深田久弥は復員しても、八穂が「深田作品は私が代作したもの」と公表し文壇の話題になっている鎌倉に戻れず、越後湯沢、郷里の大聖寺町(現加賀市)、金沢市と居住を変え、足掛け9年間雌伏する。その後、昭和30年に東京に戻ると、「山の文学者」として脚光を浴び始めることになる。八穂と別れた後は、八穂との「共同作業」はあり得ず、当然というべきかも知れないが、小説の創作活動を終えて山の文学者に転身した。八穂との離別が「日本百名山」を誕生させた陰の原動力のような働きをしたのかも知れない。志げ子夫人はよく良妻賢母振りを発揮し、深田作品誕生に対する内助の功は大きいと言われている。

八穂は44才で離婚した後、小説家、児童文学者として目覚ましい執筆活動をし、児童文学書を中心に全99冊の著書を発表したという。病気にもかかわらず、頑健と自称していた深田久弥より10年永く78才まで生きた。

(つづく)